

陽休之と祖鴻勳 : 陶淵明への距離

著者	松岡 栄志
雑誌名	中国文化 : 研究と教育 : 漢文学会会報
巻	48
ページ	40-51
発行年	1990-06-23
URL	http://doi.org/10.15068/00149934

陽休之と祖鴻勳 —— 陶淵明への距離

松岡 榮志

はじめに

六朝、とくに北朝における陶淵明の影響について考えてみたい。

これまで、陶淵明の影響及び評価という点、鍾嶸『詩品』の「古今隱逸詩人之宗也」(中品)によって論じるか、或いは顏延之の「陶徵士誄」の消極的評価、『文心雕竜』や『宋書』謝靈運伝論の無視、さらには昭明太子の「偏愛」についてふれ、おおむね高い評価がなされなかった、と結論づけるのが通例であった。⁽¹⁾

しかし、ここでは、そうした評論や批評という情況証拠ではなく、陽休之と祖鴻勳という、北朝の中でもきわだった文学者(知識人)の間にとり交わされた一通の手紙「与陽休之書」の内容に即して、陶淵明の影響のありようについて考えてみることにする。

筆者は先に、「劉峻と「山棲志」—— 仏教への距離」という小文において、南朝の文人の中でも北朝的骨気をもった(実際彼は北辺に生まれ育っている)特異な知識人である劉峻(字孝標)によって書かれた「山棲志」の中に、陶淵明の影響が色濃く存在することを指摘した。⁽²⁾ 南朝は、世を挙げて門閥貴族が跋扈し、その頹廢的な氣風が広く行きわたっていたが、それにあき足りぬ人々は、陶淵明の精神世界に深く共鳴していたようである。昭明太子は、むしろその象徴的存在であり、何ら特異な存在ではなかった。では、北朝においてはどうか。これが本稿の出発点である。

—

「陽生大弟。吾比以家貧親老、時還故郡。」

祖鴻勳から陽休之に与えられた手紙は、このように始まっている。全文四六九字からなる駢體文の小品である。

まず、陽休之に向かつて、「大弟」と呼びかけていることから、祖鴻勳の方が年長であったことがわかる。『北齊書』卷四五文苑伝に載る祖鴻勳の伝によれば、「天保初卒官」（『北史』では、「齊天保初、卒官」とあるから、北齊の天保年間（A・D・五五〇—五五九）の初め、五五〇年ごろに世を去ったことになる。いっぽう陽休之は、『北齊書』によれば、「隋開皇二年、罷任、終於洛陽、年七十四」とあることから、五〇九年に生まれ、五八二年に世を去ったことになる。したがって、その内容から見てこの手紙が祖鴻勳の晩年に書かれたと考えられるので、もし五五〇年だとすると、祖鴻勳は五十歳前後、陽休之は四十二歳にあたる。その年、つまり東魏の最後の年である武定八年には、陽休之は侍中を兼任する。まさに、位人臣を極めたことになる。手紙の中で（「而吾子……」）振佩紫台之上、鼓袖丹墀之下」（佩玉を紫台の上に鳴らし、長袖を丹墀の下に振っている——朝廷で大いに活躍しておられる）と述べるのは、こうしたようすをさすのであろう。

祖鴻勳の生年については、細かい考証を要するのでここでは省略に従うが、おおむね五〇〇年前後とみてよい。以下、『北齊書』の記述に従って、祖鴻勳の伝記について少し見ておこう。

祖鴻勳は、涿郡范陽（河北省涿県）の人。⁽⁴⁾父の慎は魏に仕えて雁門、咸陽の太守となり、治政に功があった。金紫光祿大夫のまま在位中に卒し、中書監、幽州刺史を追贈され、惠侯と諡された。

鴻勳は弱冠（二十歳、ここでは「年少」の意）にて、同郡の盧文符と共に州の主簿に招かれる。そして、僕射の臨淮王彧が上表して鴻勳を推挙したので、奉朝請として中央朝廷入りをする。この時、ある人が鴻勳に向かつて言った、「臨淮王さまが君を推挙してくれたので榮転を果したのに、君は少しもお礼にうかがおうとしない。これはちとまずいのではないかね。」すると鴻勳が言う、「国のため才能ある者を推挙するのは、臨淮王の仕事なのだから、私がどうしてわざわざお礼をいわねばならないのだ。」臨淮王彧は、これを耳にして喜んで言った、「私の目に狂いはなかった。」

臨淮王彧が尚書僕射になったのは、正光五年（五二四年）九月のことである。彧も「少有才学、時誉甚美」（若い頃から才能と学問があり、世上の評価も高かった）といわれ、南朝梁の武帝となる蕭衍が、その舎人陳建孫に彧の人となりを見させたところ、「風神閑儻」（風貌も性格もものびやかで俊逸である）と評されたほどの人物である。その

生涯において数多くの人物を発見し推挙したであろうが、「それは推挙した者の仕事であるから、わざわざ礼を言う必要はない」といってうそぶいたのは、この鴻勳以外にほとんど例を見ないであろう。(だからこそ史書に特筆されているのである。)

その後、孝昌年間(五二五—五二七)から永安年間(五二八—五三〇)の初めにかけて、葛榮が南攻した際に、河別將として滑台(北魏の河南四鎮の一)を守る。永安の初め、元羅が東道大使となるに及び、封隆之、邢邵、李暉、李象と共にその子使(副使)に任じられる。さらに東濟北太守に除せられるが、父の老疾を理由に辞退し、ついに任地に赴かなかつた。後に、城陽王徽が上奏して司徒法曹参軍事として招くと、都の洛(洛陽)の徽のところへやって来た。そこで徽が鴻勳に向かつて「臨淮王どのが推挙した折には、とうとう挨拶に行かなかつたときいているが、今度はどうしてわしのところへやって来られたのかな。」とたずねると、「このたびあなた様の府へ参りましたのは、任地への赴任であり、お礼を申し上げに来たものではございません。」と答えた。さらに廷尉正(刑獄、司法をつかさどる官。長官である廷尉の次の位)に転じた。

城陽王徽が司徒であったのは、永安元年九月から翌二年

七月(太尉に遷る)までであるから、東道子使、東濟北太守、司徒法曹参軍事の職はこの一年間に歴任したことになる。

『北齊書』は、右の記述に続けて、「後去官帰郷里。与陽休之書曰」(後に官職を辞して郷里に帰る。陽休之に書を与えて曰く)と記し、その手紙の全文を掲げる。その手紙の内容は後に詳しく見ることにして、その後段の記述にも触れておこう。

南朝梁からの使者がやってくると、勅命をもって鴻勳に相手をさせた。高祖(高歡)はかつて鴻勳を并州に呼び寄せ、「晋祠記」を作らせたが、好事の士はその文章を玩賞したという。位は高陽郡(范陽の隣郡)太守に上ったが、官にいて清素であつたので、妻子は寒さや飢えに悩まされた。時の有識者はこれを高く評価した。天保初年、太守のまま故郷で没。

『北齊書』文苑伝に収められるほどの文才と識見をもちながらも、その豪毅な性格のゆえに、それほど出世もしていない。また、逆にそのゆえにこそ「文苑伝」に収められたのだが、その手紙の受取人である陽休之と比べると雲泥の差がある。⁵⁾しかし、その手紙に記されるように、その後半生を大いに楽しみ自得して生きた。この様子は、陶淵

明のそれと酷似するが、その手紙に入る前に、陽休之について何かいつまんでその経歴と人となりを紹介しておくことにしよう。

二

陽休之の伝は、『北齊書』卷四二、『北史』卷四七陽尼伝に載る。その記述量は、祖鴻勳の伝に倍するので、ここでは大略を記すにとどめる。

陽休之、字は子烈、右北平無終（河北省薊県）の人である。父の陽固は、魏の洛陽令をつとめ太常少卿を贈られた。その息子五人の中の長子である。「儒爽有風概」（俊才であかぬけており、さらに堂々として風格がある。）と評され、学問を好み、詩文を愛した。当時の人々は、「能賦能詩陽休之」（賦でも詩でもいずれもすぐれた陽休之）とほめそやした。幽州刺史の常景、王延年はともに彼を州の主簿として招いた。

魏の孝昌年間（五二五―五二七）に、杜洛周が薊城（今の北京）を打ち取ったので、休之は宗室及び郷人数千戸と共に南の章武に逃げ、青州へ移った。さらに、兄弟のみ都へ逃げ難をのがれた。

建義元年（五二八）中、太尉記室参軍に遷って、軽車将

軍を加えられる。永安（五二八―五三〇）年間には、洛州刺史李海が啓して冠軍長吏に除せられる。さらに、普泰（五三二―五三三）中には、魏収、李同軌と共に勅命で国史を修撰する。

そして、武定二年（五四四）には、ついに中書侍郎に除せられる。七年には、太子中庶子に除せられ、給事黄侍郎に遷り、中軍將軍、幽州大中正に進む。八年には、すでに述べたように侍中を兼ね、節を持し爾書を奉じて并州に至り、顓祖（高洋——北斉の文宣帝）の説得に当たっている。以後、その性格が「疏放」であったことから、顓祖の怒りを買ひ、北斉の初めには一度左遷されたりしたが、後にまた侍中を兼ね、尚書右僕射、中書監を歴任した。彼の人となりについては、次のように記されている。

休之好学不倦、博綜經史、文章雖不華麗、亦為典正。邢、魏殂後、以先達見推。位望雖高、虚懷接物、為搢紳所愛重。休之は学問を好んで倦まず、經史に広く通じていた。

その文学作品は、華美ではないが、典雅かつ端正であった。邢邵、魏収の没後は、先達と仰がれた。官位や声望は高かったが、虚心坦懐に人と接したので、士大夫に好まれ尊重された。

やがて北周が北斉を継ぎ、さらに隋がその後を承ける

と、和州（洛陽の西南）刺史の任を辞し、隋の開皇二年洛陽で没した。享年七十四歳。著した文集は三十卷（『北史』では四十卷）、その撰に係る「幽州人物志」とともに大いに世に行われたという。

こうして見てくると、若い頃から没する直前まで中央の職にあったことがわかる。それは或いは彼自身の意に反することであったかも知れないが、結果的には祖鴻勳と対蹠的な一生を送ったことになる。『北史』には、右に引いた「亦為典正」の後に、「魏収在日、深為収所輕。」（魏収の在中には、きわめて軽んじられていた。）という一節が挿入されている。魏収自身も、「碩学大才、然性褊、不能達命体道」（碩学で大いなる才能の持ち主だが、性格が偏っていて、天命を表現し道義を実行することができなかった）——『北齊書』魏収伝）といわれ、その著『魏書』も「穢史」と称されたが、温子昇、邢邵と並称され北朝を代表する文人の一人であった。休之がこの魏収に軽んじられた原因は、やはり「性疏放」によるものと考えられる。

それはともかくとして、ここで必要なことは今まで述べてきたことの外にある。つまり、陽休之が『陶淵明集』を編撰し、その序を残していることである。今、陶澍本『靖節先生集』より、左に引いてみよう。

余覽陶潛之文、辞采雖未優、而往往有奇絶異語、放逸之致、棲托仍高。其集先有兩本行於世、一本八卷、無序。一本六卷、並序目。編比顛亂、兼復闕少。蕭統所撰八卷、合序目誅伝、而少五孝伝及四八目、然編録有体、次第可尋。余頗賞潛文、以為三本不同、恐至亡失、今録統所闕並序目等、合为一帙十卷、以遺好事君子。

私の見ますところ、陶潜の文学作品は、表現技巧の上では必ずしも第一級とはいえないが、しばしば目を引くすぐれた語があり、自由気ままの極致であり、その境地は至高である。その集には二種類あり、これまで世に広まっている。一本は八巻で序無し。一本は六巻で、序目を付す。いずれも編次が錯乱し、また失われた作品も多い。蕭統が撰じた八巻本は、序目誅伝を合わせるが、五孝伝及び四八目（「聖賢群輔録」）を除いている。しかしながら編録のしかたに体系性があり、順序を追って読むようにできている。私は陶潜の作品が大いに気に入っており、もしこのまま三種のテキストが異なっていれば、ついには亡失に至ってしまうおそれがあるので、ひとまず蕭統のテキストに無いものや序目などを収録し、合わせて一帙十巻とし、以て好事の君子に贈るのである。

ここで陽休之は「余頗賞潛文」と自ら言うように、陶淵

明の詩文を好んだこと、またそれが昂じて十巻本を作るに至ったことを明らかにしている。このテキスト編撰の時期については、橋川時雄がその著『陶集版本源流攷』の中で、北齊の武平六年（五七五）という説を出しているが、確定はできない。⁶⁾これ以後、北朝、隋唐を通じて、北宋の宋庠十巻本が現れるまでテキストの編撰はほぼ行われていなかったことから、陽休之の愛好とテキスト編撰は、陶淵明の影響を考える上で、特記すべきものといえよう。

三

さて、その陽休之に向かつて、祖鴻勳が手紙を送っている。恐らくは、これ以前にも二人の間に連絡はあったであろうが、今日ではこの一通のみが伝わるにすぎない。以下、大きく段落を区切って、読んでいくことにする。

陽生大弟。吾比以家貧親老、時還故郡。在本県之西界、有雕山焉。其処閑遠、水石清麗、高巖四匝、良田數頃。家先有野舍於斯、而遭乱荒廢、今復經始。即石成基、憑林起棟。蘿生映宇、泉流遶階、月松風草、緣庭綺合、日華雲実、旁沼星羅。檐下流煙、共霄氣而舒卷、園中桃李、雜松柏而蕙情。時一牽裳涉澗、負杖登峰、心悠悠以孤上、身飄飄而將逝、杳然不復自知在天地間矣。

陽休之様。私は近頃家が貧しく親も年老いておりますことから、思い切って故郷にもどりました。本県の西の境界に雕山という山があります。そこは閑静で、谷川も清らかに流れ、四周を高い山々が囲み、良田が数頃あります。わが家の祖先がそこに別荘を作りましたが、戦乱の中で荒廢しておりましたのを、このたびまた手を入れて人が住めるようにしました。川岸の石を運んで基礎を作り、林から木を切り出して家屋を建てました。つたは伸びて屋根をおおい、泉の水はぎざはしをめぐって流れます。月と松、風と草が庭の端で美しく調和し、日華（むくげ）と雲実（じゃけつ）は沼にそって満天の星のように繁っています。簷下を流れるもやは、雲と共に巻いたり広がったり、園の中の桃や李は、松や柏にまじって青々としています。時に裳をかかげて谷川をわたり、杖にたよって峰に登れば、心はるけく雲に上ったかのように、身は軽やかに風と共に吹きすぎるかのように思わずうっとりとしてわが身が天地の間に存在することすら忘れてしまひそうです。

冒頭の「陽生大弟」については、すでにふれた。次の「以家貧親老」の句は、『宋書』隱逸伝の陶潜の部分「親老家貧、起為州祭酒、不堪吏職、少日、自解歸。」をすぐ

思い起こさせる。そして、官を辞して故郷に帰ったのも同じである。

次に、自分の隠棲の地について述べるのだが、ここではむしろ謝靈運「山居賦」や『宋書』謝靈運伝にいう、「靈運父祖並葬始寧県、并有故宅及墅、遂移籍会稽、修营別業、傍山带江、尽幽居之美。」（靈運の父祖ともに始寧県に葬られたので、その故宅と別墅があった。そこで、そのまま会稽に籍を移し、別荘を修理経営し、山に沿い、川に面して、幽居の美を尽くした。）とあるが如く、山に沿い、川に面した隠棲地の様子を、美しく鮮やかに描き出すことに眼目がある。この作品は、実はこのあたりの表現がみどころになっていて、『六朝文絮』に採られたのもその描写の美しさと対句のうまさによると思われるが、ここでは詳しく触れる余裕がない。しかし、次の「園中桃李、雜松柏而蔥蒨」の句は、陶淵明「帰園田居五首」其一の、

榆柳蔭後簷 榆と柳は後の簷を蔭い

桃李羅堂前 桃李は堂前に羅なる

の世界を意識している。さらに、「時一牽裳涉湖、負杖登峰」の句は、『六朝文絮箋注』が指摘するごとく、淵明の「与殷晋安別」の、

負杖肆游從 杖を負みて游從を肆まにし

淹留忘宵晨 淹留して宵と晨を忘る

を意識し、また、「心悠悠以孤上、身飄飄而將逝」の句は、同じく「与殷晋安別」の、

飄飄西來風 飄飄たり西より来る風

悠悠東去雲 悠悠たり東に去る雲

や、「婦去來兮辭」の、

舟遙遙以輕颺 舟遙々として軽く颺り

風飄飄而吹衣 風飄々として衣を吹く

を思わせる。随処に淵明の詩句や語がちりばめられているといえよう。さらに言う、

若此者久之、乃還所住。孤坐危石、撫琴對水、独詠山阿、舉酒望月、聽風声以興思、聞鶴唳以動懷、企莊生之逍遙、慕尚子之清曠。首戴萌蒲、身衣縑襪。出藪梁稻、婦奉慈親、緩步當事、無事為貴。斯已適矣、豈必撫塵哉。

こうした楽しみを十分に尽くすと、やがてわが住み家へもどります。一人きりで川面に突き出した大岩の上に坐り、清流に向かって琴を弾ずる。また山の隅で詩を吟じ、満月に向かって酒杯を挙げる。さやかな風の音に思いを致し、清らかな鶴の声に心を動かす。まことに莊子の逍遙遊の境地を願ひ、尚子平の曠達な態度を慕うのです。のんびり歩くのは車に乗るにも勝り、事無きが一

番、これこそ自分にふさわしい生活。どうして宮仕えして麿尾（私子）をふりまわす必要などありませんか。

ここでは、自己の居所での暮らしぶりを述べる。前半の琴を弾じたり、酒を酌むのは、隠者の典型的な生活ぶりであり、『宋書』隱逸伝に載る宗炳のようすに似ている。その伝にいう、

好山水、愛遠遊、西涉荆巫、南登衡岳、因而結宇衡山、欲懷尚平之志。

山や川（自然）を愛し、遠くへ出かけるのを好んだ。

西は荆山や巫山に至り、南は衡岳に登った。そこで衡山に廬を建て、尚子平の志を継ごうとした。

もちろん、陶淵明が酒や琴を愛したことは、あまりにも有名な話であるが、ここではむしろ、後半の部分、つまり畑へ出て農作業に従事する姿が、大いに陶淵明を思わせる。周知のように淵明の詩文には、農作業の喜びをうたうものが少なくない。たとえば、「歸去來兮辭」にいう、

悦親戚之情話 親戚の情話を悦び

楽琴書以消憂 琴書を楽しみ以て憂いを消す

農人告余以春及 農人余に告げるに春の及ぶを以て

し

將有事於西疇 將に西疇に事有らんとす

またいう、

富貴非吾願 富貴は吾が願いに非ず

帝鄉不可期 帝郷は期すべからず

懷良辰以孤往 良辰を懷いて以て孤り往き

或植杖而耘籽 或は杖を植てて耘籽す

登東臯以舒嘯 東臯に登りて以て舒嘯し

臨清流而賦詩 清流に臨んで詩を賦す

この境地は、まことに祖鴻勳の描く態度や境地と一致している。

次に、それと対蹠的な陽休之の生活がのべられる。

而吾子既繫名聲之韁鎖、就良工之劊劊。振佩紫台之上、鼓袖丹墀之下。采金匱之漏簡、訪玉山之遺文。敝精神於邱墳、尽心力於河漢。摛藻期之盤繡、發議必在芬芳。妓自美耳、吾無取焉。嘗試論之、夫崑峰積玉、光沢者前毀、瑤山叢桂、芳茂者先折。是以東都有挂冕之臣、南國見捐情之士。斯豈惡梁錦、好疏布哉。蓋欲保其七尺、終其百年耳。

それにひきかえ、君は名聲のくびきにつながられ、お上の命令や指示に従う身となりました。佩玉を身に帯び、長袖を宮廷で振るうにぎにぎしさ。朝廷の秘閣に入出し、各地の遺文や漏簡を集める。精魂を傾けて先秦の典籍や漢魏以降の辭賦を読み、その議論も明晰かつ清新で

す。これはもとよりほめたたえるべきものですが、私には無用です。試みにこれを論じてみれば、そもそも崑崙山に産する玉は、よく光ってつやのあるものが先にくだかれ、瑤山の桂樹は、よく繁るものが先に手折られる。

このために、前漢の逢萌は東都洛陽の城門に冠を脱いで懸けて去ったし、楚の国には屈原のように国を捨てて去った人物が出たのである。これは、美しいものをにくんで粗末なものを好むからでしょうか。思うに、その七尺の身体を保ち、生涯をまっとうしたいと思うからです。

宮廷に出仕して、恐らくは意気揚々と闊歩しているであろう陽休之。文才も頭のきれも申し分ないであろうが、こうした姿は私には無用であると祖鴻勳は言う。ちなみに言うならば、崑山の玉も瑤山の桂樹も、美しく目立つものほど先にくだかれ手折られるのだから、君もまたその運命から逃れ得ぬに違いない。かつて世の乱れを歎じて冠を脱いで故郷に帰った前漢の逢萌や、世に容られぬまま楚の国を去り、ついには汨羅に身を投げた屈原を君は知っているだろう。これはなぜだ。これは、わが身体を安らかに保ち天寿を全うしたいと願うからだ、という。

そして、手紙は次のように結びれる。

今弟官位既達、声華已遠。象由鹵弊、膏用明煎。既覽老

氏谷神之談、応体留侯止足之逸。若能翻然清尚、解佩捐簪、則吾於茲山莊、可辦一得。把臂入林、挂巾垂枝、攜酒登巖、舒席平山、道素志、論旧款、訪丹法、語玄書、斯亦樂矣。何必富貴乎。去矣陽子、途乖趣別、緬尋此旨、杳若天漢。已矣哉、書不尽言。

今や君は官位も榮達し、声誉もあまねく高い。象はその牙が重用されるために殺され、油脂はまわりを明るくするために燃やされる。老子の説く、谷神の言（谷神不死、是謂玄牝）を読んだからには、留侯（張良）の止足の樂しみを体現すべきです。もし、君が高尚にして廉白な道を選び、佩をはずして簪を捨てる（官職を辞して隱遁する）なら、わたしはこの山莊において、君のために一肌脱いでもよい。君の手を取って林へ行き、頭巾を脱いで枝にかけ、酒をさげて丘に登り、敷物を山で広げよう。そして平素の志を語り、旧交を温め、煉丹法を求め、玄理の書を論じる。これこそ樂しきことではありませんか。どうして富貴である必要がありませんか。去りぬかな、陽君よ。二人の途は背反し、その志も異なってしまうました。この考えを速きより思いますと、はるか天と地のようです。やんぬるかな。書は意を尽しません。官位も榮達し、意気揚々たる陽休之に對し、言葉を尽く

して、止足の楽しみを知れ、そして一刻も早く帰隠しなさいとすすめる祖鴻勳。やがてその予言通り、陽休之は北周に至って挫折を味わい、隋の受禪の翌年、七十四歳の生涯を閉じる。彼はこの祖鴻勳からの心のこもった申し出を、生涯のうちは何度となく思い起こし、複雑な思いにとらわれたに違いない。あるいは陶淵明の詩文に対する愛好も、この手紙が契機になって強まっていったのかも知れない。

おわりに

今日残された文献や資料を見る限り、陽休之と祖鴻勳における陶淵明の影響を考えるならば、おおむね陽休之のほうに深い影響が見られる、ということになる。それは、先にあげた「序（録）」の中で、陽休之がはっきりと「余頗賞潛文」と言明しており、また「陶淵明集」も編撰しているからである。一方、祖鴻勳の方はといえば、この手紙以外に何も残されていない。つまり、祖鴻勳自身は、一言も陶淵明に言及していないのであるから、その影響については云々しがたいということになる。

しかしながら、こうして「与陽休之書」を読んでくると、その随処に淵明の作品を意識した詩句や語があり、その人生における態度にもきわめて近いものがある。

これは、もう少し広げて考えれば、陶淵明の影響というより、陶淵明も選び取った伝統的な処世態度を祖鴻勳も選び取ったとしてもよいのかもしれない。限りある人生を、どのように充実して生きるか。自己の良心に従って生きるためには、任官と帰隠、栄達と布衣、いずれの道を選ぶべきか。これは、陶淵明と祖鴻勳、さらには陽休之を含めて、魏晋南北朝という目まぐるしい王朝交替期に生きた人々にとって、ぬきさしならない共通の問題であった。

言葉を換えて言えば、陽休之は陶淵明の作品を好んだが、祖鴻勳は陶淵明の思想を自己のものとし、陶淵明の処世態度を実践して生きた。ここで私たちは否応なく「影響」という問題を論ずることの二面性に向かい合わなくてはならないことになる。

少なくとも私には、祖鴻勳の方が思想においても文学においても、はるかに深刻に陶淵明の影響を受けていたと感じられる。祖鴻勳の受けた影響は、いわば「同時代者」としての影響であり、「読者」としての影響ではなかった。これまで陶淵明の影響を言う場合、おおむね「読者」としての影響を言うのみであったが、「同時代者」としての影響という側面からもう一度文学史を見直してみる必要があるように思われる。

(1) 北京大学中国語言文学系中国古典文学教研室編『中国文学史綱要二』(北京大学出版社、一九八三年九月) 魏晉南北朝文學(袁行霈編著)は、第三章陶淵明「第四節陶淵明的地位和影響」pp.五二—五三)において、次のようにいう。

陶淵明在当时并不受人重視。陶淵明的好友顏延年在他死後所作的「陶徵士誄」中只称赞他清高的人格、对他的詩并未充分肯定。在他死後六十年、沈約作「宋書」把陶淵明列入「隱逸伝」、对其文学成就也不重視。齊代劉勰作「文心雕龍」、評論了歷代詩人、竟無一字涉及陶淵明。梁代鍾嶸作「詩品」、将他列入中品、放在陸機、潘岳之下。直到梁蕭統才对陶淵明的文学創作開始重視、他親自替陶淵明編集、作序、給以很高的評價。

(2) 『東洋文化』第七〇号、pp.八一—一一三。東京大学東洋文化研究所、一九九〇年一月。

(3) 熊永謙『魏晉南北朝駢文選注』(貴州人民出版社、一九八六年十二月)の「与陽休之書」題解では、この手紙の成立時期を孝武帝の時(五三二—五三四)としている。これは、本文中の「采金匱之漏簡、訪玉山之遺文」の部分で陽休之が国史編纂に参加していたことをさすとして擬定しているのだが、もしそう考えると、祖鴻勳が三五才前後の頃の作品となり、隱遁するには少し若すぎるように思われる。又、その前の部分の「遭亂荒廢、今復經始」の「遭亂」を孝昌二年の杜洛周の幽州への侵攻とするのはよいとしても、その「經始」を武泰元年(五一八)九月の事と特定するのは、少々無理があるように思われる。つ

まり、私の考証によれば、この年には、また司徒參軍事の職にあり、それからさらに廷尉正に転じた後に帰郷しているからである。

(4) 「涿郡范陽」は漢代の地名であり、祖鴻勳在世の頃は「范陽郡」であった。詳しくは、校点本『魏書』地形志上の「注」p.二四七六)を参照。

(5) 『北齊書』文苑伝論にいう、
自邢子才以還、或身終魏朝、已入前史。或名位既重、自有列伝、或附其家世、或名存後書、輒略而不載。今綴序祖鴻勳等列於文苑者焉。

(6) 「宋庠丞相私記、則謂為陽僕射、拋北齊書伝称、武平六年、除正尚書右僕射、陽休之編成陶集、似在其時。」(文学同盟社、一九三一年)すなわち、北齊の宋庠の「宋丞相私記」に「其錄有十卷者即陽僕射所撰」とあることから、陽休之が正尚書右僕射であった武平六年とする。しかし、武平元年にはすでに尚書右僕射を兼任しており、宋庠も「正尚書右僕射」といわずに「僕射」とだけ言っていることから見て、武平六年とは断定できない(武平年間の数年間ならいつでもよい)し、むしろ陽休之の生涯で最も活躍した北齊の最も高かった官位を付して「陽僕射」と呼んだにすぎないと解釈すれば、なお確定が難しくなる。そこで橋川氏も、「似在其時」の如く推定の「似」を用いたのであろう。

(7) 魏晉南北朝の隱者の住み家の一般的情况については、吳世昌『魏晉風流与私家園林』(原載『学文』月刊第二期、一九三

四年。のち『羅音室學術論著』第一卷、中国文芸聯合出版公
司、一九八四年九月、pp.三二一―三六二にすぐれた分析があ
る。

(東京学芸大学)